

本妻和讃

泉鏡花作

「書生さま／＼。」

と背後から甘いやうな女の聲で、

「ありがたい、書生さま。」

今度は少し切つた聲で呼ばれたので、さきへ歩いて居た川村圭吉は振返つた。――振返つて見てぎよつとした。聲の其の甘たるく若さうなのは似も附かない、よぼ／＼媪さんが、冬の日南に薄ぼけて、枯尾ばなに似て吹かれて居る。日中で可かつた、たそがれだつたり、時雨れたり、分けて夜でもあらうものなら、身の毛が悚立つに相違ない。

場所も一口坂である。

九段が近い大通

りを土手へ下りる廣い坂だが、一方にお濠の並木を控へて、片側が、女學校だの、工場だの、片側邸ならびだから、閑である。最も往還の時刻だと、雨上の虹が湧くやうに、女學生たちが一齊に群つて、今出来の千代紙に色インキを打覆けた景色に成るのだが、午後もやがて四時だから、上、下、廂髪も靴

も見えぬ。

さみしい處で唐突に呼ばれたのであつたが、旦那と呼ばれる風俗はなくても、もし／＼でも、一寸でも、お前さん、呼びやうはいくらもあるのに、「書生さま」——鯉丈が書いた和合人に、秋雨のそぼ降る夜、のらくらものが集つて、怪談地口で、しんねこに淋しがる時、なかまが二人、前町の空屋にひそみ、茄子の仕掛で其の能樂亭の雨戸をトン／＼。ぞうふら即ちめかぼんで、主人を呼ぶ聲が、「和次さまや、和次さまや——和次郎さまや、和次郎さまや。」戸を開ければ影もなし、しめて引込めば、又トン／＼、絲を引いた茄子どのが敲いて、「和次さまや、和次さまや、和次郎さまや、和次郎さまや。」——人間音でない。異變な聲だと、眞面目に怯かされる話がある。よくそれに似て居た。「書生さま。」それに「感歎詞。」が要るものか。

唯、怪訝に熟と視ると、何の事だ。

「何だ

」

圭吉は思はず苦笑した。

「剥身屋の媪さんぢやないか。」

むき身と雖も一屋體の商賣である。敢て吐出すや

うに應じたわけではなかつただけれど、うつかり書生さまに對したので。第一、たゞ見知越の――

それも圭吉の住居から大通へ出る横町の路地のと

ば口が其の店で、通りがりの見知越、此と云つて

口をきいた事もなかつたのである。爺さんの方は知

つて居る。四季をり／＼の雨ふり、風ふき、秋雨の

夕暮がた、わけて時雨の日、雪の朝は、しほから聲

は此だぞ、と思はれる、ニしばつた奴を喝と絞つて、

鐵拐仙人を穀のまゝ吐出す如く、「あさり、殻あ

さり、蛤やい、大馬鹿小馬鹿の剥身やい。――蛤

や――い。――おゝ、寒い。――壮に降つて

る。晩には蛤鍋と願ひたい。其處で臺所から井を持

つて、襟を掻合はせ掻合はせ、戸口へ細君が買ひに

出ると云つた寸法で、別して、雪の名ぶつだつた。

また此の親仁が、町内の床屋の店を、うそ／＼覗く

時と云ふと、講釋仕込のせきばらひ、えへん！

「ほゝう、武は益々壮ぢやな。」と無精髻の胡麻

で和へた、大な馬頭でニヤ／＼と入つて来て、

「曲垣平九郎先生が和太平ぢやて。向井

藏人が百々平ぢや。お前さん、越前家に於かせられて、馬術上覧の日と思はつせえ。五十萬石の御家中、汗水を流す處を、お馬場の隅から、厩中間の、百々平が片目を出して。」と、赤目の剥身そのまゝのどろりとした臉へ、輪にして貝殻爪の太い指をゴツンと當、「ニヤリノ」と覗いてござるて。」また掌で頤を支へて、ぐるりノとニはす、遠慮のない馬面だから此の形が餘程可笑い。居合すものは嬉しがつて、「景氣は何うだね、百々平さん。」と水を向けようものなら、「ふゝん、的等は、浮名を百々平と言つた。また馬の剥身屋と稱へて、町内の若い衆が不景氣の錢ない時、「馬肉で飲らうぜ。」は淺蜷であつた。――総長屋が取拂をくつて、さしわたし八町ばかり此の一口坂の崖裏へ越したと聞く。しかし、二三年來、雨ふり、雪ふりには圭吉の町内へ喚いて來た。――その、女房の媪さんである。

誰も云ふ事だが、剥身屋と云ふと目が悪い、ひどいのは掃溜へ蚯蚓の湧いたやうなぐしやノとした

のがある。媪さんも、汐かぶれの目を眩しらしく、西日を仰ぎながら、やぶれた紺足袋、緒のゆるい日和下駄で、横あるきに近寄つて、

「あんた、もし、お忘れですやるな。」

ほんに久しい事ですよつていな。」と愈甘い。

「はあ」

「私もな、あんたの御近所に居りました頃は、お通りがけの節、時々お見掛け申したけれど、些とも氣がつきませなんだぞいな、もし、今な、此處で、ちよつと御様子を見ましてな、あゝ、ほんに然うであつたと吃驚するほど氣がついて、それだな、吃驚ついでや、もし、うっかりお呼び申したのでござりますよ。書生さま、あんた、とうの以前、本郷の伊達さんにいらつした方ではござりませぬかえ。なあ、間違うたら御免なさりましょ。」

「間違ひません。」

伊達の名の、我がために貴きにつけて、剥身屋の媪にも殆ど恭いまでに正しく答へた。いや、其の名は圭吉のためにのみ貴いのではない。渠の恩師、いまはなき、伊達先生は、畫壇の巨匠として、世のた

めにも貴いのであつた。

「何うして？ お媪さん。」

「どうしてとおつしやつて、私も、ありいと思つたぞいな。町なら三つ四つより離れては居らんけれど、場所が違つては、お顔を見ても、ふつゝり思出しもしませんほど、年も澤山たちましたし、何も彼も變りましたによつて、お覚えのないのも最もでござります。あのな、私はな、書生さま、然う言はんとつりが悪い。――御免なさりましよ、ほゝゝ。」

と氣味の悪いまで、笑の腹籠を口許へ浮ばせて、「此の坂を上つた右の横町や――今剥身屋で居ます家は、左の崖下で、軒がな、崖の中途にぶら下つた鹽梅や、ほゝゝ。とんと鳥の巢か、蠶の棚の工合やし、ほゝゝ。庖丁と蛤を描いた看板ばかりが坂の中途に上つて居て、覗くと廂は谷底や、底同然や、ほゝゝ。お互様の故郷でな、ほれ、あなた、大雪の積つた時は、此の下に薪屋あり、八百屋ものござ候と、空へかきつけが出来ると言ひますやる。

同然や。按摩が引窓から落ちて来たは、たとへやが、ほんに、按摩どころか、郵便屋さんも、屋

根ねの空そらを走はしりますぞいなあ。　　ー　　けど、むかしはな。

その誰たれであるかを、刻こく下に聞きかうとする、圭吉けいきちに取とつては、苛いら立たしいほど持もつて廻まはつて、のんびり、ゆつたりと間まを引ひいて、

「むかし右みぎの方ほうの横町よこまちに　　ー　　そこもな、家並やなみがまるで變かはつて居ゐますけれど。」

と、まだ間ま伸のびがして、袂たもとをかさこそと薄汚うすよごれた切端きりはしを、效かひ性しやうなく撮出つまみだした鯉口こひぐち、其その手てで、坂さかを向むかうへ指さしして、

「　　彼處あそこに居ゐました髪結かみゆひいな、お園そのでござりますぞいな、もし　　ほゝゝ。」

「あ、髪結かみゆひさん、あの、上手じやうずの？」

と思おもふのと言いふのと同どう時に、そのゆつたりと、のんびりで、したゝか惱なやまされたのを思出おもひだした。鬚まげのどの形がたを結ゆはしても、尤もつと人にひとにすぐれたが、紫むら、藤ふじ色いろ、切きれを扱あつかつて、髪かみの艶つや、櫛くしの照てり、さし込こみの簪かんざしの光ひかりまで、「てんじん」を結ゆはせては、上手じやうずも不思議ふし議ぎな、巫子みこと呼ばよばれた名譽めいよであつた。

容色と、それに上品なので聞えた、伊達先生の令夫人が、意氣で、婀娜な、色つほい。「てんじん」の姿を時に見掛けたものは、いまもいくらもあらうと思ふ。此の髪結、お園が結ひ手だつたからである。いろだか、亭主だか、年下の寫眞屋と同居をして居て、内は番町の、何とか館だと、甘つたれた聲で自ら名告つて、髪結さんと言はれたがらない。其の何とか館のおかみさんと言はうものなら相好を崩したものだつけ。また大のなまけ屋で、きちやうめに結び日になんぞ出て来た事はめつたにない。其處で、伊達先生の玄關番をして居た圭吉が、幾度も迎の使者に立つたのであるが、「館」どころか、二階の硝子戸さへ嵌つて居ない。長火鉢の奥の薄暗い小部屋から、いま起きたと言ふ顔をして、胸も裸もはだけた年増が、煙管を片手に、ずるり／＼と立顯はれて、「血の道が起りましたねえ。」と聲までだらけて居るのが癖であつた。時とすると、其の顔を洗つて支度をするまで、土間に居催促をして、圭吉は此の道を、連立つた事が度々である。――「髪結さん、いや、おかみさん、よくお煩ひだが、血の道と云つてどんな病氣なんですか。」

「ありい、書生さま、私知りませんわ、ほゝゝ。」
いや、その、ありいばかりでも、一度で思出さなければ成らなかつた。のに――

十八九年前に、一度雪國の其の故郷へ歸つた切、音づれが絶えた。――伊達先生の令夫人は、斷念めがたう惜しがつて、圭吉が一年歸省する時、見事な土産ものを託つた。――其の居處を探すと、山手の荒果てた大な侍邸に、また寝て居た。古疊の上を暗い奥から、例のずるり／＼と出て来て、
「ありい、伊達さんの書生さま。」とべつたり式臺に膝をついて、それでも可懐がつかつた。「東京へ出たら、是非。」と言づけを言つて別れたが、人づてに土地で聞けば、五百石どりのお嬢さんが、江戸から来た鳶のものと出来て勘當され、なかまの鳶の女房の腕の冴えた髪結に、仕込まれたのださうである。
とばかりで、消息は絶えたのである。

それが、剥身屋の此の媼さん。

成程おなじ場所、おなじ所で出會つたの

でないと解るまい。

みつわぐむまで老おいにけるかな。あの血ちの道みちが目めに
崇たつた。赤爛あかたれの臉まぶたに溢あふるゝ目脂めやには、雲丹うんを塗なすつた
やうである。

「ほゝゝ。」

と、つけもなく又また笑わらつて、其その薄汚うすよごれた切端きれはしで、
ちよぼ、ちよぼと、目脂めやにを拭ぬぐふ。

圭吉は、忽ち、赤目の髪結が、影に成つて座に映るのを感じた。

「――一つ此の婦の髪を結はせて見ようか。」
それは、置炬燵を傍に、見るも痛々しいまでも瘦せおとろへた、病身な従弟の女房に、さし向つて居た、時の間であつた。

名はお銀さんと言ふ
が白絲のやうに、
炬燵にも、づんどの火鉢にも、柱にも、灰にさした
火箸にも、青白く巻けさうに窶れて居る。

「こんなに成つて了ひました。」
大島の緋の羽織の袖ぐるみ、中に小袖の袖口を包んだまゝ、薄い淺葱の襦袢の裏をずりと返した
それも手首に重さうに
隔てぬな

かとして、二の腕までくりりと捲いて、露呈に見せた、
が、熟と視ると、お銀が自からの睫毛の濃さ、重さ
にも、細い腕は堪へやらず押伏せられさうで可哀で

あつた。

「お、お、寒い／＼、早く片づけて。」
肉を透く青い筋の、柳が霜に散るやうに、見る／＼
悚氣立つのを見て、火鉢をぐい／＼と我が膝で押
しながら、圭吉は然う言つた。

力が膝に傳つて、お銀の菱々とした片袖は、炬燵
蒲團に凭掛つた風情に成つて、

「もう、寒いなんか通越して居るんですよ。」
と、仇氣ないまでに仰向いて、訴へるやうに
餘り近々と向合つた面ほてりに、頬に片手を掛けた
のさへ、力なく、辻落ちて、ちらりとこぼるゝ友染
とゝもに、火箸の上へかゝつたのである。

「そんなに雪に成つてこれはお世辭だよ、」
と故と目遣ひしながら、
「消えて行くやうな事を言ふものぢやあゝりませ
ん。――私だから可いが、ね、お留守中には、
餘り軽々しく他人に見せて貰ひたくないもんだ。惱
ませられるぜ、串戯ぢやない。長煩ひだつて、お綺

麗いですよ。」

「もう治なほりません！」

「え、」

「死ぬ病人びやうじんには垢あかがつかないつて言いひますわ。」

「馬鹿ばかな事を言いふもんぢやあゝりません。小兒こどもたちも聞きいてるぢやないか。」

と圭吉けいきちは、屹きつとたしなめるやうに言いつた。

「小兒こどもは聞ききあきて居ゐますもの、何なんとも思おもひはしませんよ。」

と、垂たれた項うなじも、げつそりとして白しろい。大柄おほがらで、背せのすらりとした女をんなだけに、病やんで脱ぬけたと云いふ髪かみさへ、支さへかねさうで危あぶなつかしい。

「ねえ、坊ぼうや。」

と、親鳥おやどりは、弱よわい翼つばさを開ひらく状さまに、肩かたをしなはせて、其處そこに男おとこの兒この顔かほを視み上げた。

此この雛兒ひよっこは、白毛しろけいと絲まるの丸帽ぼんし子と、取手との擬寶ぎぼし子しをぼんと宙ちゆうに立たてゝ、出で來きるだけ踏張ふんばつても、尚なほ其その

半を剩す櫓一杯引跨いで、母さんと客との眞中に、
高々と炬燵に乗つて、洋服の衣兜から、堅豆を摘出
しちや餘念もなく食つて居る。

十三から一、九つまでの娘たち、一樣におさげに
結つたのが學校がへりの袴を取つたばかりのなりで、
襖一重の八疊にみな威勢のいゝこと、師走間近な八
ツさがりを、縁の障子を開放し、半ば縁側へ出たの
も居て、揃つて毛絲の編ものする。

夜具、蒲團、毛布、葛籠、定紋萌葱の風呂敷も、
掛けたり積んだりし投出しな——此は一家がこゝ
へ引越したてで、まだ片づかないまゝなので。

長男は學校の寄宿舎へ入つて居て、もう一人男の
兒は、何處へか素飛んだものらしい。

其處で、客には從弟の、内の主人だが、藤枝時太
郎と云つて、家元格、一流の舞踊の師匠で、年配と
言ひ技と言ひ、もう一つ男振まで申分のない人物で、
弟子たちの稽古、座敷の勤め、いづれ、行はれゝば

行はれるほど忙がしい家業から、留守に不思議はないのである。が、こゝに留守なのは、たゞ留守なのではない。もう五七年以前から、もと藝妓のいろで出来た妾があつて、舞臺も其處に置いて居る。すっかり別宅で納つて、こゝの引越しの時にも、時さんは居合さず、まだ其つ切歸らない様子が見える。

お銀は、身體の病より、心の悩みに傷むのである。

「ねえ、坊や。」

お母さんは櫓を見上げた、小兒の顔から瞳を外らして、客に横顔の袖に涙を包んだ。

圭吉は 此の坊やにさへ面目なかつた。

「――實は震災以來と云ふものゝ、其のずっと前から不沙汰をして居たのである。従弟の家は、あの時、まる焼に成つて、當時板橋の方へ引越した。遠さも遠し 圭吉の方も住家は焼けなかつた

までの事 一 殆ど半壊れの混雑紛れで

勿論、月の経つうちには、外出に便宜な時さんの方とは、會つて、お互の生命の無事を悦びも祝ひもし、一所に杯を取つた事もある 従弟もの

み手だ。 一

さて、つい四五日前の事、従弟から 一 震災後は旅行勝でもあつた 一 久しぶりの端書で、

「すぐ圭さんの近所へ。」と云ふ字が大きく目について、其の板橋から麹町へ引越しの通知が来た。新しい親類が一軒殖えたやうに思つたのである。ただし、氣に成るから消印をためすと、府下の本家からではない。これぢやあ歸られない築地の別宅からであつた。不埒千萬と苦りながら、すぐにも家見舞に

出掛けよう。小兒が大勢だ、前餅、蜜柑

とは言ふものゝ、お互に所帯持の事だから、どつさりお惣菜に成る肴が、出ず入らずで可かりさうだが、何か取まぜて然るべきものはあるまいかと、圭吉は女房とも心づもりの相談をしつゝ、二三日訪ひおくれた。――

「――をかしな事があるんです。近頃はやる、此もね、三角關係と云ふ奴だよ。――お銀さん

お耳觸りかも知れないが、もう此は、あなたには病氣見舞も同然な言葉だから堪忍したまへ。

――引越の端書をうけとると、あの――番町番地と云ふのを、何故か、いきなり、英國大使館の方角と思つたんだね。ね、丁ど私の居る所と、此の一口坂の方角と、大使館の見當を見ると、大きく三角の形に成るから。

其處で、妙な事は、御存じの出不精の處へ、おひ／＼年末だし、まあ、お庇で口繪だの、挿繪だの、いづれ小口ぢやあゝるけれど、版下の方もいそがし

くつて、湯へ行くほかは、めつたに用たしにも出な
かつたのが、珍らしく、今日は二時頃から散歩に出
たのさ。此頃に珍らしい、また長閑でね、

日がかげると急に寒く成つたが――かへり花
でもありさうな小春日です。――散歩に、手近
な所なら、清水谷の公園と云ふんだけれど、久しく
外出をしないと、何だか町筋が可懐い。

それも混雑する處は辟易さ。市ヶ谷見つけから、田
町うらへ入つて、合羽坂、淨瑠璃坂――よく仇
討の講談に出る處だ、山の手だけれど江戸らしい。

並んで名所があるんです。逢坂、ほりかねの井、若
宮八幡と續く。坂下の仲町、船河原町は何となくも
の静でね、肴屋の店の鱈の切身に日のほ

か／＼と當るのも長閑に見えたよ。あゝ、

此處がお濠の松にも遠見の富士にも、美しい、赤い
鳥の社だ、と三重吉さんの新築を見たり、

萩の枯葉に蝶を見たり――その近處の板塀を、
梅の枝が覗いて、もう咲きさうな日當りに、笠木に
乗つて、お猿が一匹うしろ向きに、ほか／＼してち
よんと居たのさ、友染のちゃん／＼子を着てね。私
は少時立停つて見て居たのさ、新見附を入るとすぐ

の處だから、大きいのが着いて、小兒たちを見せに遣るといゝね。――づゝと神樂坂へ出て、買ものをしようかと思つたんだけど、やがて日も陰つたし、そろ／＼歸らうと思つて新見つけを入つたんだが、それが久しぶりです。まだ、あの工事中に、稻妻形にキリ／＼と曲げて掛けた假橋を足駄で渡つて、眞中頃で、杭を打込む濠の底の深いのに、足が震へて欄干につかまつて漸と越した以來ですよ。あなたもとの元氣だと、（おんぶをおしな。）と背中を出してお笑ひだらう。

――見つけを入つて、然うね
一口坂

を、大な船底形に見た處で、うしろから呼ばれて、思ひも掛けない、夢のやうな人に逢つたんだよ。――え、そつちの三角かつて？
串戯ぢやない。――そんなに三角に打撞ると大地が揺れます――まあ、穩にお聞きなさい。何しろ、よぼ／＼の媪さんだ。

媪さんは、郵便を出しに行つた歸りだと言つたが、私のうまれ故郷のものでね。」

颯と一度、此の時も、影が立つた。

「五十年前のお嬢さんさ。それを、袖にしては不深切のやうだけれど、何しろ、とぼ／＼して居て、話しながら歩行くのはじれつたいから、一寸寄道があると言つて、ようもない其處等の門札を覗いたのさ。―― 媪さんは坂の上で別れたがね。――

おや と思つた。

時さんの引越通知の―― 町ぢやあないか。

私はまるで見當を違へて居た。―― 番

町の番町知らずと云つてね、あなたも、やがておなかまだよ。―― 番地も近い。 見附の

方へ小戾をすると、土手下へ掛けて番地が殖える。

此方へ二軒三軒と若く成つた。ぴつたり合つた。

―― 此家の柄にしては些と堅すぎる邸だけれど、何しろ地震後の事だと思つて、また一二軒覗くと、紙の名刺が貼つてある。引越したてだ、違ひない。

が、私は通り過ぎたんです。―― 餘りの御不沙汰。 地震の日はあなたが、病身な其の

からだで、搦鉢のやうな窪地から、針の山の崖を炎
に追はれて、小兒もたちと迷惑つて、漸と九段の銅
像の下に野宿して、二日間、火の海を視ながら嬰兒
の牛乳の鑊一つ、それも水もないのを、倒れたり、
轉んだり、で、堪へて居なすつたと云ふのを、私も
あとで、野宿をしながら聞いたばかり、其切の御不
沙汰です。可厭に、じんぎ立てをすと思はれては
困るけれど、引越の祝に何一つ、今日は持たない。

入りかねたから一度素通りをして、坂の中途まで
行つたがね。さあ、然うなると、また、見す／＼、
現に、其處に、その地獄から蘇生つたやうなあなた
が居るのを、見舞はないでは何うしても通切れませ
ん。また、すご／＼と返つたがね、――
今度は、若い女の兒、それも娘だちした聲が聞え
たから、勝手が違つて、又弱つたんですよ。――
前には、いつも大抵嬰兒の泣聲が聞えたんだから
ね。不斷は黙つて通る處を、家の勝手も違つたし
其處で、更つて、（御免、頼まう。）
を遣つたんだが、

胸一杯を、一つづけに、此の挨拶は五分の上を出なかつた。

「何にも言はずに、
お互に唯無事で、

—— 處で、嬰兒は何うしたの。」

「あかんぼなんて。」

式臺上へよろ／＼と出迎へて、「まあ、」と

云ふまゝ、—— 其處で一寸猶豫つた圭吉に、お銀

は取継らないばかりにして、いきなり、炬燵の、こゝ

へ連込んだものであつた。が、火鉢を押すのも、息

ぎれに、うすく染めた臉さへ、颯と蒼褪めるまで寂

しい顔して、

「あかんぼなんて、
私はもう、世にも

人にも棄てられました。小兒の巢の巢守なんです。

此の身體ですものね、だき乳母の役も勤

りません。乳なんか、もう皺びて、一つたらしだつ

て出ませんよ。」

「いえさ、まあさ、
あの、いつか、牛

乳で育てゝ居なすつた、あの、嬰兒さ。」

と、座敷を三して、次の室の長火鉢手前なる、襖

の影を覗込むと、

「まあ、皆、小父さんに、お辭儀をしないのかね。」

娘たち三人が、

「入らつしやい、」

「小父さん、」

「今日は。」

おさげに、リボンがひら／＼ひら、蝶も蜻蛉も片親の留守。

「はい、はい。」

圭吉は胸がせまつた。

「あの、大いのが、とみですよ。——容子が

いゝつて、小父さんが、いつもお讚めなすつた。」

「あゝ、今も容子が可い。」

其の大人びたのは、一番に縁の端に居て、おさげを横顔に庭を向いた。

「あとも皆別嬪だ。」

二人は揃つて、うつむいて、莞爾した。

圭吉は涙ぐんだ。

「 圭さん。 」

お銀はくもり聲で、

「ほんとうに、

しばらくですのね。あ

なた、

此の兒が、其の時の嬰兒ですよ。 」

と、はじめから炬燵に踏みはだかつた、其の兒の毛絲帽子を、瘦せた指で軽く弾いた。

「震災からも二年です、嬰兒は、もう五つ。 」

「あゝ、相濟まない、御無沙汰。 」

と、圭吉は、こゝで小兒に、面目ない氣がしたのであつた。

既に此の兒は、母さんに、嫩のまゝの杖である。

何故と云ふに、今しがた玄關へ訪れて、

其の 「 頼まう。 」 を遣ると、二人づ

れで、ばた／＼と出て来た女の兒が、見忘れた小父

さんの顔に、解せないと云ふ、くるつとした目をし

たから、そこで圭吉の言つた事が可笑い。

「お母さんはお内？ 」 多分、お父

さんの居ないのは承知の上の口上で。

「お母さんはお内かい。 」 「あい。 」 と駈込

むと直ぐ其處へ。――「どうもお聲が、」と
言ひながら、褌の亂るゝまで急いで出た、お銀はも
う肩がふるへた。追飛んで、どんと来て、その袖の
下へ立つて、毛絲帽子を出した、此の男の兒が、病
身の母さんの
其處で杖のやうに見えたの
であつた。圭吉は今更ながら、其のやつれ方にぎよ
つとした。小袖の柳條と束髪も、たゞ面影の映す骸
骨で、白脛に艶なる蹴出しも、冬冷し。
模様の水仙
腰は葉よりも細かつた。

但幽に殘の枝に色香が通ひ、削つた骨に霞を掛
けて、白き人膚の薰つたのは、遠い道の引越に、そ
の上のかぜ氣のため、今日はじめて、小兒等のこと
で湯に入つた。湯ざめをしまいと、すぐに床へ、そ
のすつばりと引被つて居た處だつたと言ふ
消えさうな湯の香である。

成程、寢床が炬燵を籠めて取つてあつた。

四

「ねえ、坊や。」

と圭吉は、お銀さんの言尻を其のまゝに、炬燵の大將にてれかくしを言つて、

「君かい、おぎい／＼遣つて居たのは。」

「知らんねえやい。」

「はゝゝ、最だよ。」

「健坊 何と云ふ口を利くんです ー

母さんの兄さんぢやあゝりませんか。私が何うかして御覽 どんなにお世話になるか知れや

しない。」

「お銀さん、何を詰らない。」

「えゝ、でも築地にも兒が二人までありますから、彼方の方が可愛いんですもの、お父さんはたのみに成りません ー さ、ちゃんとお辭儀をして。」

頭を壓へようと手を伸ばすと、

「知らんねえやい。」

と、振刎ねて、炬燵の上へ突立つた。毛帽子の白

時しも、俄然として、虚空から呼ばゝる聲あり。

「やい、健、女に構ふない、此方へ来い。」

聲とゝもに、ポーンと縁側へごむ鞆が躍込んだ。

「何處から呼んでるの？」

中の娘が、

「ゴルフはね、お庭の椿の樹に上つて居ます。」

「ゴルフ。」

と圭吉が聞いた。

「渾名なんですよ、此處に居た健の上なんです。」

「ゴリラだわ。」

と上の娘が、さますやうに言ふや否や、又一ツ鞆が飛んだ。

「壮だなあ、肩がきつきかい。こゝに居た勇士に

もありさうだね。」

「えゝ、ジャツキー。」

「ジャツキー？」

「活動寫真にあるんですとさ。」

「あゝ、辻貼紙や廣告で数々お目に掛る、當時天

下の豪傑だね。しかしよくお育てなすつた、――

「お見事だ。」

「可厭ですわ。圭さん、私はもう。」

「いや、寧ろお手柄です。――眞個にお楽しみ

だ。」

「楽しみどころなものですか。もう精も根もありや

しません。――あゝ、煙草。さ、さ

あ、こゝに、敷島が。さあ、めしあが

れ。」

圭吉が、がさ／＼と兩の袂を探すのに、早く心着
いて、のみ分の、半ば揉みくしやにした敷島ひとつ
の紙函を、手で押して、押してよこして、強ひるの
は、強ひるのでない。我が身を分けてのませる深切、
兄も同じだと云つたのが、此の優しさは、姉が弟に
對するやうな、煙でなしに従弟を通じて、血は自か
ら通ふのである。

あゝ、敷島の一本さへ、況や、母が兒のために、
其の骨を削り、血を絞り、肉を裂いて、惜まない恩
愛は、たゞもてなしの煙草ほどにもないのを思へ。

「おすきなのを買はせませうか。」

帯を撫でて天鷲絨の手ずれた墓口を出して言った。

「――ぶん金の高島田に、白玉椿、浮彫の銀簪、

緋の紋縮緬の十九の娘で、この時さんと見合をし

た時、――圭吉が橋渡ししなり介添なり、媒妁人

した。――「幾久しく、何うぞ。」と口の裡で、

ひたと両手を支いて立つ拍子に、銅貨の音の墓口を

バツタリ落して、ハツと跪いて拾ふうとして、一生

の大事に取澄した姿を亂して、立つて遁げしなに、

白脛が、深く淺くちら／＼と緋に搦んだ。其の媚か

しさと言つてはなかつた。――當時婚姻を妨げる

ものがあつて、もと本郷の大根畑の立派な呉服屋の

娘だが、落魄れて、いま、物置のやうな二階住、母

親の記念の簪が一枚看板、「屋根裏の銀簪。」

と人のうはさの旦那取だと言つたにもかゝらず、

家元の若旦那は決然として式を擧げた。――雙

方酔拂ふと、時さんの背を敲いて、「あの眞白な

處へ、就中。」「馬鹿を言ふなよ、圭さん。」

見合の時も、借着の上下、ゆきたけが、膚に合はな

かつたゝめであつた。――いや、その時分から、

嫁御、御新造、おつかさん、癖としてお銀さんは、

いつも暮口で所帯をして離さない。

「おや、これは可懐い。」

「地震の時も、此一つと牛乳の罐なんでしたの。」

圭吉は、むかしを染々と、梳らぬ黒髪の纏れを視た。

―― 二たび髪結が目を遮つた。――

「いや、難有う、近頃、着込んだもんだから、袂の間に挟つて―― あゝ、あります。」

煙草錢を、内證で
あなたに
忘れやしません。」

また其の頃は、かたづいて、暮しに不自由はなくなつても、「屋根うらの銀簪。」 なき名の影がそこら中にもや／＼するため、姑小姑の中に、居所もないまでに、舞臺うらの暗がりくらがりに悄乎立つて、しを／＼と泣いて居た。「お銀さん。」 「圭さん。」 「辛抱なさいよ。」 「はい。」 「たゞ、

おとつさん、時の父、圭吉の叔父きが大江戸だ。――
- 舅の床を取つて寝かす、人目のない時枕を拂つて手をついて、「お嫁さん、あなたも大切な人の娘だ。相濟まんが辛抱をして下せえ。」もう、身を碎いても、といつも言つた。あゝ、苦勞をして、し續ける。

「一體身體は何うなんだね。」

「何うにも、最う仕様がありません。お醫師様は方々専門の方を、
薬ぜめにもしましたけれど。」

「そりや、勿論さ。」

「おほねは、胃腸が悪いんですつて、もうね、お恥かしいんですが。」

下腹をそつと、太脛のあたりまで、柳條のなぞへに手で劃つて、

「此處等まで、胃が下つて居るつて言ふんですよ。もう疼みも何うもしませんけれど、おなかゞ筋張つて、胸が塞りましてね、些とも、ものが食べられないんですわ。」

「そ、それが不可い、其が何より不可いんだ。」

「――震災前にも、時さんと、或處で飲んだ歸途

に 從弟はぐでんに酔つて居た。ひどく酔

ふとその癖の、外套を引しやなぐつて、釦を外して、

「遣つ了へ、持つてけ。」と、ぐら／＼と首を

掉る。其の時は自動車だつたが、電車でも道傍でも

此を遣る。「此頃は着てるよ、大丈夫だ

よ。」と圭吉が肩を抱いて壓へると、「うゝ、

運轉手に遣つ了へ。」と身悶えをしながら、

「圭さん、頼む お銀に飯を食はしておく

れ。」「飯を食へと云つておく

れよ、僕も不心得だが、何うにも弱つた、何にも食

はない、段々痩せる。遣切れない。あや

まる、すまん、あやまるから飯を食へと――

君が言へば屹と聞くんのだ。>――頼む。「と、

のめるやうにお辭儀をして泣いて居た。自動車は築

地の別宅へ向つたが、其の晩は寄らずに歸つた事が

ある。

「何が何でもね、時さんは、どんなに其を心配し

て居るか分らない。――食べなくつちや不可い
ね。」

「咽喉へ入らないんですよ、我慢にも――は
じめはね、口惜くツて、食断ちの
と、さすが言淀み、櫓に落ちて散亂れた緋の椿の
ひら／＼を、それともなしに搔寄せる指の弱さ。吐
く血を悶ゆる手とも見えれば、また唯花片よ、其の
まゝに、母鳥の餌になれかすと念じられた。」

「いつかも圭さんの御意見から氣を取
直しましたけれど、今度は食べたくても食べられま
せん。尾籠なお話なんです、食ると直ぐに吐す
んですもの。えゝ、薬は三度々々。それで
も、朝、牛乳が半合ばかりせ、あとは、おも湯のや
うなのがお茶碗に一杯半ぐらゐ納りますばかりで
す。」

「それぢやあ活きちや居られない。」
「えゝ、もう、お暇乞がしたいんですわ。」

「また、馬、馬鹿なことを　ー　以前、あなた、
更料で何うしました　かけつけに蒸籠が三
枚、天麩羅二つ、おかめ一杯、蝦の鬼殻焼が一人前
か。透かさずおだまきを根こそぎにして、合の手に
蒲鉾さ、あと口だと云つてあたり芋をべろりと退治
て、鬼神を驚かした事があるぢやあないか。再び巴
におんななさい。」

「ほゝゝ」
とはじめて莞爾して、胸も息も引きながら手を掉
つた。

後生々々、
それだけは　小兒

だちに聞えて御覽なさい。　さうでなくつ
てさへ、暴れぐひをして、私をば呆れさせます。お
惣菜のگانもどきなんか、丸ごとよ、大井に山のや
うに積出すのが、あつと云ふ間に消え了ひます。半
ぺんの附焼でも御覽なさい、まるで、手品の蝶々の
やうに、ちやぶ臺の上を飛ぶんですもの。お前いく
ら食つた、姉さんは何杯、と御飯をね、マラソン競
走で食べるんですからね。やあ、兄ちゃんより二杯

少い、負けるものか、ウーンと云ふと、うしろへ手を支いて、下腹を突出して、胸をすかせては詰込むのよ。女中が追焚をする間、フレー／＼と云つて、どし／＼疊を揺りますわ。」

「まかなひ征伐だ　　――　　暴徒だなあ。」
圭吉は舌を巻いた。

「親の因果が子に報ふと云もふのですかね。――　　――　　惜みはしないけれど、觸るだらうと思つて叱言を云ふのも、大抵寢床に居るんですから、しめしはつかず、私の言ふことなんか一つだつて肯きはしません。父さんが居ればですけれど。　　圭さん、

築地から歸るのが、一月に一度か、二度　　だ
最も板橋は不便でもありましたけれど

もんですからね、小兒たちがね、　　「うちのお父ちゃんは、顔も洗はないで、朝御飯も食べないで、何處へ行くんだい。お母ちゃん。」　　それで居てさ。」

と言葉が途絶えて、
「御近所の方がさ、　　「ついお見掛け申しませんね。お父ちゃんは、　　と聞くと、小兒がね、誰も

教へないのに、「旅行　――　ですつて。」

「――私や、私や
と又途絶えて、」

「それですもの、偶々歸ると、小兒たちが、

「入らつしやい。」　ツて言ひますわ。

出て行く時は「行つてらつしやい。」　健なんか、

「然やうなら。」　だわ、私や、私や

覺悟はして、あきらめて居ますけれど、活（いき）がひがあり
りません。　――　あの、末（すゑ）の兒（こ）も、喧嘩（けんくわ）したり、

人（ひと）様に憎（にく）まれさへしなければ、踏（ふ）まれも蹴（け）られも
ますまい、もう私（わたし）　――　

片手（かたて）で襖（ふすま）を半（なか）ば引（ひ）きつゝ、そツと袖口（そでぐち）を目（め）に當（あ）
た。

「　――　圭（けい）さん、眞個（ほんとう）にお暇（いとま）乞（こ）がしたうござ

んすよ。」

「お銀（ぎん）さん、お銀（ぎん）さん。」

圭（けい）吉（きち）は低聲（こしゑ）ながら力（ちから）を籠（こ）めて、

「何（なん）て意氣（いき）地（ぢ）がないんです。病氣（びやうき）は半（はん）分（ぶん）氣（き）からで

すよ。元氣（げんき）で追拂（おつばら）つてお了（しま）ひなさい　――　引込（ひっこ）思（し）

案（あん）ばかりして居（ゐ）ないで、時（とき）さんを惚（ほ）れ直（な）さして遣（や）

勢いきほひでなくつちや　ー　第一だい、今日けふは服装なりのせゐか、
年としも十ウばかり若わかやいだ。」

「いゝえ、引摺ひきずつて居ゐて何なんですけれど、引越ひっこしの時とき
着換きかへたまんま、脱ぬぐのも、ついおつくふで、自分じぶん
で折疊をりだみが面倒めんたうだものですからね。」

「振袖ふりそででも紋着もんつきでも、ずん／＼引出ひきだして着きるんだ
ね。　ー　三四年ねんぜん前まへだっけか、あなたがはじめて、
築地つきちの事ことを私わたしに聞きかして、　其その時ときはじめ
て、餘あまり鬱ふさぐから氣晴きばらしだ、と云いつて、煙草たばこを喫のん
で居ゐなすつたのを見みて、一寸ちよつと、三十さんじゅうを越こしてから、
たばこを喫のむのは容子ようすのいゝものだと思おもつた。
あんなに引ひかぶつて居ゐつても然さうだもの。薩さつ
張はりと綺麗きれいにして、お化粧けしやうもしてさ。」

「まあ、まさか。」

「まさかつて事ことがありますか、少々せう／＼こ
て塗ぬりで構かまはない、髪かみも結ゆつてさ。」

「こんな髪かみを。」

「うむ、餘あまる

まだ房ふしりだ。」

「嘘うそばかり、圭けいさん。」

と、それでも嬉うれしさうに、見みて欲ほしさうに、頸うなじを白しろく、横よこに髪かみを傾かたむけて、たよ／＼として肩かたを落おとした。

「―― 目めの赤あかい、白髪しらかみの媪おつなが、三さんたび、座ざを横切よこぎつた。――

「あ、電話でんわがあるね。」

「お弟子でしが世話せわをして下くだすつて、電話でんわづきで借かり

たんですが、―― 何處どこ？」

と一寸ちよつと膝ひざを伸のばした。

玄關げんくわんうらには、上うへの娘むすめが末すゑの娘むすめを抱だいて立たつて、その末すゑの電話でんわを聞きく。

「あの兒こがうまいんですよ。―― うちへなんて、何處どこからも、めつたに電話でんわの用ようはないんですよに

「―― 何處どこだよ？」

「お父ちちちゃん。―― 然さよなら。」

「待つまちて居ゐるツて、然さうおいひよ。」

上の娘が抱きながら言ふと、

「切つ了つたよ、

姉ちゃん。」

「あのう、あのね、晩に歸るツて、
そ

して、お酒は、お爛のにするからツて。」

「贅澤な事を言やあがる。」

と圭吉が思はず言つた。

「小父さんがいらつしやると言へばいゝのに。」

「でも、私、名を知らなんだもの。」

「道理だ。」

「あゝ、ね、道理だね、築地の姉ちゃんはお綺麗だから、圭をぢちゃんも、彼方へばかり。」

「くだらない事を、小兒の前で、何だ、あんな南京鼠。」

「え、」

「だつて、目も鼻も口も一所、すべてが小柄に、くる／＼と器用に出て、利口でこつ／＼にかたまつて、ひよい／＼小廻りに廻る處は、まるで南京鼠

ぢやあないか。あなたは、皺しなびても
怒おこら
ないで、怒おこらないで 鶴つるなんだ、お銀ぎんさん、
何を、南なんちゃん、鼠ねずみなんぞ。 ー 確しつかり乎おし、そ
の皺しわを、すべ／＼と白しろい膏あぶらのやうに、したゝるばか
りにして見みせる工夫くふうがあるんだ。

恰あたかも可よし、時ときの奴やつが晚ばんに歸かへるは面おも白しろい。

女ぢよ中ちゆうは居あるね ー 可よし、拙せつ者しや自じ分ぶんに臺たい所どころへ罷まかり出でる。

お勝か手たを拜はい見けんながら。 あなた立たつちやあ

不い可けいよ、堅かたく可いかい。先まづ 熱あつ爛かんを 一ひと

銚てう子しと

ー

「お銀さん。――いゝ話を聞かせよう、――
髪結さんもお聞きなさい。」

長火鉢のわきの窓下に、お銀は思切つて頸をのべて、むきみ屋の婆さんに髪を結はせて居た。

何年にもない、此の光景を希有がつて、上の娘まで寄つて見る。その小兒たちに取巻かせて、布袋の腹へ入つたやうに、炬燵にすつぽりと潜つた圭吉は、から子の年増で寝そべりながら、手酌で傾けて機嫌で居る。

「其處でと、お銀さん、例の見合の時
以来の墓口を、一寸、其の帯の間からお出しなさい。
い。」

「髪結さんのなら、あの――
「いゝえ、違ひます。とに角お出しなさい。――
あゝ、姉ちゃん、憚り様――其處で話です。」

私わたしの、本郷ほんがうの伊達先生だてせんせいが、その、髪結かみゆひさんのお馴染なじみの奥さんおくと、新婚旅行しんこんりよかうの時ときなんだが、こゝは一つ。」

と、きちんと起きた。

「二十五と、お十九さ——何どうです、たゞ事ことではない。お年としごろだらうぢやないか。

場所ばしょが江えの島しまでね、二日かめのお午ひるす過ぎ、いづれ、お目覚めめは午ひるすを過ぎたとしてね、一昨日をと、ひからの、若奥様わかおくさまおぐし上げと成なつた。盛場さかりばの遊あそび場ばだ、不自由ふじゆうはあるまい。髪結かみゆひをと成なつた時とき、客きやくで居あて、おなじ旅館りよくわんで、名乗なつて出でたのが、その髪結かみゆひのお園そのさん。」

「それでも若わかうござりましたなあ。」

「寫眞館しやしんくわんの色男いろおにと、多分たぶん一所しよだつたらうと思おもふんですがね。」

「ありい。」

と氣味きみのわるい感歎詞かんだんし。

「お年ごろなり、御容色なり、お髪の見事さ、一世の晴に、家業冥利におぐしあげがしたいと言ふのだ。美談です。尚ほ偉いのは、高島田も人並には結ひますけれど、（てんじん）ならばと云ふ申出だ。そのまゝ東京へお歸りに成つてもと云ふんだとさ。」

「ありい。」

「奥さんはね、のちのお話で、ゾツと身ぶるひをなすつたんださうだけれど、異だ、と先生は、髪結さんの氣を買つて、そこで、きやうだい、くしげ、と成つた。桂に蘭の香の、丈に餘るのを、うつくしく捌くの、先生もお若かつた。寢轉んで、金ぐちをふかして見ながら、其のとき、「おい、紙入を持つてるかい。お出し、姫ごぜとあらうものが、錢勘定なんかするものぢやないよ。」

「酷いね、先生は——髪結錢も宿の拂も、新夫人の懷中が大半豫算に入つて居たんだ。其切、お取上げ。唯今の此の墓口のやうな目球の金めつきの剥げたのぢやあない。銀

のぴら／＼のついたはこせこですよ。光つたね。」

「ほんに／＼輝きました。おぐしも御容色も眩いやうでござりましたぞいなあ。」

「その上に美談がある。大家のお嬢さんがお嫁入の晩、母君から渡されたまゝの紙入だから、餘程あつたに違ひない。が奥さんは、いまもつて金額を御存じないと言ふんです。此をきくもの、若返らざるを得ませんや。髪結さんも、きちんと腰が極つて來たぜ。」

「ありい。」

「その日さ、あとで山道を御散歩です。巖角、石段に落椿が燃えるやうです。」

圭吉は、輪のまゝの椿を拾つて、うつくしく炬燵に重ねて言つた。

「針も糸もはこせこにあつたかな、奥さんに手傳

つて、先生は花瓣をおぬきなすつた。其の時

おち椿つまにさゝ折る山路かな
紅葉先生の

句
―― 拝借。

と云ふ俳句があります。極彩色で一対です。わか
いものより、大人より、片瀬、腰越の小兒どもが當
てられた。わツノと言つて囃したとさ。」

「お十七八、 だきごろ、ねころ、

お手を曳 きごろ、だましごろ。」

――

「ありい。」

「 と恚う言ふんだ。潤達な先生だもの、
何、それ式に ー 「兄哥や、おもしろい唄だな、
教へてくんな。」 スケッチブックにおうつしなす
つた言ふんです。若返らざるを得ないぢやないか。」

「お十七八、
お手を曳ひ だきごろ、ねころ、
きごろ、だましごろ。」

「お十七八、だきごろ、ねころ」

娘むすめが口くちずさんだ。

小兒こどももつゞけた。

「だきごよ、ねごよ。」

「うまい、やれ／＼、皆みんなで唄うたへよ。」

「まあ、まあ、圭けいさん。」

「何なに、お邸やしきぢやあなし、腹はらの中なかから紅べにかねつけて

るお家柄いへがらだ。」

むき身屋みやの婆ばあさんが、とりわけ變へんな感歎かんだん詞し

「ありいー」

「お初、お初。」

「へいッ、旦那様。」

一口坂の上を九段の方へ、自動車が颯と走る。

それから出たのであらう、門までは何とな

く遠慮をしたかも知れない。坂の下角で、

藤枝の時は、小走りに刻んで来る我が家の女中

を呼留めた。あの人数で、時々賄退治を

遣る家庭だから、女中はがせい一方のまだ年のわか

い山出しであつた。

「買ものか？」

引越にも居合はさなかつた留守の様子に、捜りを

入れて見たかつたのである。

「へい、」

と、きよとついた顔をしながら、

「買ものではねえですだ、旦那様、内は、へい、

大變だよ。」

時太郎は我にもあらず色が變つた。

「御病身な御新造様が、今日は、へい、お湯さ入らした。それは可え鹽梅だがや、をかしなお客様が来さしてよー御新造様と炬燵の間で、泣いたり笑つたりさしつけえ。何が、其のお客様は、勝手に臺所へ突入つて来て、自分でお酒の爛をつけるだアね。不都合な事だ思ひまじけんど、それは、へい、私知つた事ぢやねえだ、何も構はずと居ましつけえがや、やんがて經つと、臺所口から、陰氣な、氣味の悪い、赤目ツくされの白髪によぼ／＼した婆々がや、ふは／＼と入つて来て、スイと茶の間へ突抜けたゞね。私や、ぞつとしましたゞ。何か、取揚婆の怨靈のやうなその婆が、御新造様の髪を結ふだ。これ、御新造様は、かぼそい身體で、膚脱で、お白粉だ。眞白な抜衣紋でなあ。その氣味の悪い婆々が、髪をへい、梳く處が、蛇で成つてのたくるやうだね。だん／＼結上げる時分にな、お客様は、炬燵で酔拂つて鼻唄だ。何とや、旦那様。お子たちがね、嬢さまも坊さまも手を敲いて一齊に唄出したゞ。はい、私らが聞いても、小恥かしい、だくわ、ねるわちて、面さ赤く成るやうな唄さ囃すと、御新造様は、べら／＼ぞろりとして、

何か、背戸の椿の花の樹の下を、紅色の處をお客と
二人で練るでねえか。――髪結の婆々は、長火
鉢のねきで、いゝ茶をくらつて、煙草をふかり／＼
吹かすだねえ。惡魔と痘痘神が一所に入つて、お家
中氣が違つたづら。私ら、板橋から引越
す時に、此のうちさ世話をさした、旦那様のお弟子
の嬢さまのお邸だ。御新造様は病氣だし、お前様は
お留守がち、あとはお兒たちばかりだから、何事か
あつたら、すぐ来いよ、言はつしやるもんだで、此
のさ、郵便箱の横町へ、いま、へい、駈けつける處
だあね。へい。」

と、せい／＼言つて、魂消て居る。

吻と息して、

「まあ、待て、あゝ、可かつた。待ち

な。そんな事を觸込まれて堪るものか。」

じり／＼と、おのづから横状に歩行き寄る。

「何、小兒が皆で。」

「あゝ、いま留んだかね。」

と聲をひそめて、尚ほきよとつきながら、「其

處さ出た時まで、ワツ／＼と唄が聞えたゞがね。」
何故か襟巻を深く引きしめて、時太郎がつつと入ると、かなやうに、新しい電燈の影は月に似て、紫てんじんの、類なき、艶麗な婦人を視た。寂然として、悚氣と冷い。炬燵に、遙ゆかりの色も露のしたゝるばかりなるツンとして斜にうしろ向きに背いて、澄して居る。一步すさりつも、白足袋で、スツと寄つて、

「おい。」

いや、其の聲のかゝるが否や、ポンとはずんで、アツ、横頬へ鞆が當つた。縁側から、ばら／＼、ばら／＼と、落椿の燃ゆるが如きを、娘たちが手に／＼ぶつけて、三ツ五ツ十ヲ、隙間なく浴びせかける。花片の緋を鎧つて、猛然としてゴルフ將軍、的は近し、射ごろ可、手錬なり、袂、懐一杯に、鞆を掴んで、父親の眉と言はず、鼻と言はず、眞額を狙つて、矢つぎ早に射すくめると、足が亂れてよろめく處へ、あゝ、此も母さんの骨に透つた、押入の生壁が雫の垂るまゝ、座敷に積放しの夜具の蔭から、白兎を輝

かして、伏を放つた急先鋒、踊上つたジャツキー豪傑。

「ヤツ、シイ、ヤツ、シイ。」

拳闘構の拳を下段に、丈もちやうど、そのくらゐ、父親の男の唯一の急所を狙つて、

「ウン、ウン、ウン、ウン。」

と突いて突いて、突立てる。

「あ、痛い、あ、痛い、痛、ほんとに痛い。」

「ジャツキーだぞ、やい、クーガン君を知つてる

か。」

「痛い、痛い、痛い。たゝたゝ。」

父親は、あとじさりに、ひよろ／＼と成つて、足袋跣足で式臺へストーンと落ちた。

泥のついた足袋をつまんで、しよぼけてそツと又入ると、今度は立つて迎へようとして、力なく、よろめいて、褌うつくしく炬燵の上にトンと腰をつい

た、女房お銀の手を、と跪いて取つて、熟と顔を、
見合せたのに、圭吉がほろり涙ぐんだ時、ジャツキー
は父親の肩につかまり、ゴルフは背を撫で、娘たち
は、膝に縋つて皆泣いて居た。

―― 髪結について、その時の話があつて、上手
を偲ばせるやうである。 圭吉がむき身屋

へ、その、「てんじん」を、お銀のために頼みに
行くと、もう、久しい間、忘れたやうに髪を手掛け
ないから、と云つて、何うしても肯かなかつた。わ
けを云つて、是非にと頼むと、元結を選んで欲しい

いま時では、と云ふ。しんまで紙ばかり
でよつたのは、此の近くでは四谷の大横町の小間も
の屋にあつたが、今では何うか、と言ふのである。
買ひつけの魚屋の小僧が、此の邊もまはり場だと見
えて、折よく自轉車を飛せるのを呼留めて、その大
横町へ馳らせた。

爺さんが首を振り／＼、あさを剥きつゝ饒舌る
百々平の馬が越前の馬場をまだ一廻りし

ないうちに、小僧は歸つた。元結はあつた。媪さんは、解いて扱いて頷いた。しかし、なか絶えた術の此の齒でしまるだらうか、とて、しばらく傾いて案じたが、「お爺さん。」 兩膝をつくくと、いきなり、親仁のすべ禿の頸窪にむじや／＼と總髪が残つた奴を一抓、きりゝと巻いて、引きしめて、口に結んで、ツゝ、と張つた。元結は輝いた。「痛え、痛え、何をやるや、婆さん。」 股引でもがいて、仰ぎ状に、思はず拂つた、貝むきの小刀で、プツリと切れると、上手がしめた元結の張が餘つて、仰むけに、脛を空に水を刎ねて、ひつくりかへつたのは百々平である。曲垣平九郎落馬した。

唇の元結が又光つて、お園の刀自は微笑んで、しやんと立つた。

【完】